

「オレスティア」 三部作（アイスキュロス）

ギリシヤはスパルタの王妃へレネーがトロイアーの王子パリスに拐かどされたのが發端となつて、全ギリシヤがトロイアー懲罰の遠征軍を派遣して十年、ギリシヤには未だ捷報が届かず、遠征軍總大將のアルゴス王アガムノンも歸還せず、アルゴスの人々は不安を募らせてゐたが、取分け豫言者カルカスの不吉な豫言が一層不安を掻き立てた。即ち、假令勝利を得ても「わが子のいのちの償ひを得る」迄は復讐の女神がアルゴス王家への恨みを捨てはしまい、それが氣懸りだと豫言者は云つたのだが、實は開戦當初、遠征軍船團が港に集結した時、烈風に襲はれ破滅の危機に立至つた事があつた。その時、烈風を有なめるには王女イーピゲネシアを人身御供にするしかないとカルカスに云はれ、アガムノンは船を捨て征戦を斷念するか、愛娘の「血しぶきで父の手を」汚すかの決斷を迫られ、結局、「狂氣の沙汰といはれようと」やむを得ぬとて、「必死にとりすがる」娘を海に沈めたのであつた。

爾來十年、遂にアルゴスに捷報が届く。だが、その間、アルゴス王妃クリュタイメストラは「命より大事な娘」を殺した夫に復讐すべく、夫に深い恨みを懐く親族にして情夫のアイギストスと共謀して寢刃ねたばを合せてゐたのだが、アガムノーンはそれと知らず凱旋して、アルゴスの長老達からなるコロス（合唱隊）の前でトロイアーの凄惨な破壊の有様を物語る。「アルゴスの牙」は敵の都を碎いて灰燼に歸せしめ、「生肉を食ふ大獅子」の如き味方軍兵ぐんびやうは城壁を跳び越え、敵の血を「腹充ちるまで啜り食らつた」といふのである。

次いで演劇史上頗る有名な場面となる。クリュタイメストラは館の前で、凱旋將軍が地面に足を觸れてはなりませぬとて、夫に美しい紅染めの織布の上を歩かせようとす。が、古代ギリシャでは紅染めの織布は「神々の寶たから」と信じられてをり、それを踏み躪にじるなどは「人の身」として恐しい、「己の家を踏み倒す」事になりはせぬかとて、當初、夫は躊躇ためらふが、結局説得されて織布を踏んで館に入る。要するに、「わが子のいのち」を奪ふといふ、「人の身」として許されぬ悪業を犯した事の報いを、今こそ思ひ知らせてやる、妻は暗にさう叫んでゐるのだ。

やがてクリュタイメストラは夫を殺し、館から出て来て、復讐の成就の喜びを語り、殺害の場面を振返る。急所を一撃するや血潮がどつと吹き出し、色濃い血の「黒いしづく」が「私

の體をしとどに濡ら」した時の、「この身がおぼえた喜び」と云つたら。

以上が「オレスティア」三部作の第一部「アガムムノーン」の粗筋だが、長老達のコロスは固より、クリュタイメーストラにせよ、アガムムノーンにせよ、「人の身」として道を踏み外す事への不安や恐れを皆揃つて口にする。例へばクリュタイメーストラはギリシャ軍の勝利を知つて、「呪はしい欲望が軍勢をとらへ」、「壞してはならぬものを、壞すことになりはしないか」、それが「不安でなら」ぬと云ひ、コロスもそれに呼應して、「これほどの人の血が流されて、神々の目にとまらぬはずがない」と云ふ。

けれども、クリュタイメーストラは復讐の爲に夫を血祭りに上げ血に濡れる「喜び」に酔ひ痴れるし、アガムムノーンも「狂氣の沙汰」かもしれぬと不安を懐きつつも、「女をとりもどす戦」の爲に娘を殺して敵の「血を啜り食ら」ふ。この作品には獅子や狼や蛇や鷲や鳥など、禽獸の名が頻出するが、無論、偶然ではない。古來、人間は己が正義の爲に「血の償ひ」を求めて、時に禽獸に墮するものだからである。(續く)

(久保正彰譯、「ギリシア悲劇全集1」、岩波書店)